

---

# 神々の剣

ドラゴンツリー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神々の剣

### 【Zマーク】

Z9386C

### 【作者名】

ドリゴンシリーズ

### 【あらすじ】

黒須流という武術を使う青年がある女の手との出会いにより彼の止まつた運命の歯車が動き出した

## プロローグ

自然な栗色の髪に綺麗な琥珀色の瞳を持つハ才ほど少年の前に少年の父親が倒れていた。父親は一目見ただけで致命傷と分かる傷を負っていた。

二人の回りには傷を負わしたであろう数百人の兵士達と三人の騎士が囮んでいた。

少年は涙を浮かべていた、父親の方は倒れながらも回りの敵に殺気を放っていた。

その時父親の口が微かに動く、だが少年はそれを読み取ることが出来ない。

不意に少年を囮むように小さな青白い光のサークルが生まれる。

「我が最愛の息子　　の記憶を封印し・・・戦いのない時代へ誘いたまえ・・・」

その呪文を聞いた回りの兵士達と騎士は慌てて一人に攻撃を仕掛けようとする。

「　　お前には父親らしいことを・・・してやれなかつた  
な・・・。だが・・・お守り代わりと言つては・・・なんだが・・・  
この腕輪を・・・」

そこまで言つて父親は血を口から吐き出しながら立ち上がり懐から銀色の大剣クレイモアの細工のついた腕輪を少年の手に無理やりはめ、耳元で囁いた。

「滅びを知らない神々の剣・・・これだけは覚えておきなさい」

その瞬間少年は意識を失う・・・。

惜しむように少年の頭を撫でる父親だったが兵士達が寸前の所まで迫つていたので光のサークルから出る。

「我が一族の秘宝を狙う馬鹿どもめ・・・この子が時代を流離するのを黙つて見ていいがいい」

叫ぶようにそう言つと少年を囮むように灰色の炎が生まれる。

「ふつ・・・流石に時代を渡らせる呪文を使うと白かつた炎も罪によつて灰色に穢れてしまつたか・・・。」

一瞬悲しそうな顔を見せた少年の父親だつたがすぐに普通の顔に戻つた。

「もう少し・・・もう少しだけでいい・・・我が体よ持つてくれ」願うように祈るように体に言い聞かせるように言葉を呟く少年の父親は、額に汗を滲ませながら兵士達を炎で牽制していた。その時騎士の一人が炎の壁を突き抜け少年に攻撃をしようとレイピアを突き出した。

少年の父親は考えるよりも早く少年の前に躍り出した。ザツという音とともに少年の父親の体にレイピアが突き刺さる。だが父親の顔は苦しさなど一切現れておらず逆に笑っていた。  
「間に合つたようだな・・・。」

そう言つて崩れ落ちる少年の父親の後ろで虹色の穴が生まれていた。穴はサークル内の草や土とともに少年を吸い込んだ。その瞬間あたりを青白い光が包み込んだ、光が收まるとそこに少年の姿は無かつた。

## 一話・出会い

夢の中で青年は何故か少年の姿になっていた。まったく身に覚えのない出来事だが現実味のある夢だつた。

そこにいる人間の言葉は全てフィルターが掛かつたように聞こえない、そしていつも通り目の前の血だらけの男から渡される自分がいつも身につけている腕輪、そして男が最後に口にする言葉だけはしつかりと聞こえている・・・だがそれもこの夢が終わると忘れてしまつ・・・。その言葉が終わるとこの夢は終わる・・・。これは・・・

・悪夢だ。

目が覚めるとそこは見慣れた自分の部屋であり・・・ベットの上だった。

全身汗で濡れている青年は時計を見るAM4:30・・・まだ殆どの人人が夢の中にいる時間だつた。

もう一眠りしようかと考える青年だつたが汗で濡れたベットで寝るのも気が引けたのでシャワーを浴びることにした。

心地よい熱湯を頭から浴び汗とともに先ほどの悪夢が流れしていく、浴び終わった青年は体を拭くとティーシャツ一枚着た。

そしてそのまま髪を乾かす・・・両親とは違う栗色の髪と琥珀色の瞳を青年は見つめながら思う。

朝食は何だろ？

浴室の音に気付いた両親が起きてきた。

「おはよう、親父、お袋」

青年の挨拶に両親は笑顔で答えた。

母親の方は挨拶を済ませると台所へ行つた。父親の方は青年を連れ出し離れにある道場へ行つた。

ここで簡単な説明をしよう。

初めて出て来た青年の名前は黒須成一<sup>くろすせいじ</sup>の黒須家の跡取で父親である弦<sup>げん</sup>が師範を務めている、黒須流の継承者もある。

黒須流は数百年の歴史を持つ武術で一対一であれ一対多であれ応用の効く技が多く存在している。

そして弦の最愛の妻である沙希<sup>さき</sup>もこの黒須流を少しかじつていたりする。

要するに武術一家なのだ。しかし息子である成一の戦闘のセンスは目に見張るものがあり十七歳の若さで父親の弦と並ぶほどの実力を持っている。

ついでに言つと成一は高校一年であり、ここ港町近くの北港高校に通つてたりする。

そんな経歴の成一の朝の口課が父親との鍛錬だつた。

そして今まさに一人によつて模擬戦が行われようとしていた。

体を温め終わつた二人が白い胴着を着て向かい合つていた。

「親父・・・手加減はしないぜ」

「成一に負けるような鍛錬はしておらん」

張り詰めた緊張の中先に動いたのは成一だつた。

左足に力を込めて一瞬にして弦の脇に潜り込み足払いをする。

「良い踏み込みだが・・・ハツ！」

弦は払われる対象になつた足に力を込める・・・すると当たる瞬間弦の足が一瞬まるで鉄のように固くなつた。

当然のことながら成一は足を払つことに失敗した。

「金剛<sup>こんごう</sup>か足が痛いぜ」

金剛・・・一瞬だけ己の体を鉄のよつと凄くなると金剛石つまりダイヤモンドぐらいの固さまで固めさせることが出来る技である。だが技の効果が一瞬のみなのでタイミングを取ることが至難の技だつたりする。

足を擦りながら成一は間合いを取つた、だが今度は弦が攻めて來た。

「見極めよつ！――」

弦は成一に向かつて叫ぶと拳を固く握り拳を突き出してきた。

成一は拳を受けるのではなく流した。何故なら受けてしまつとその一瞬弦は金剛を使うので手の骨が砕けてしまつからだ。

一発でも受けたらよくて骨一本悪くて病院で寝たきり生活という攻撃が続き傍から見たら一方的な展開に見えていた。戦闘が急に終わりを告げた。それも弦のうめき声をきっかけに

「 飄々と立つ成一に腕を抑えて苦しむ弦腕には紫の痣が出来ていた。

「 金剛攻手を破るとはな・・・。」

金剛攻手とは金剛を派生した技で手を金剛で固くし攻撃すること技のことを言う、似たような技に足技の金剛攻足がある。

「 まあね・・・固くなつてない腕の部分を俺の得意の神威で攻撃したのさ」

神威とは、攻守を兼ね揃えた黒須流の奥義の一つで独特な受け流し方により受け流された手足はダメージを溜めていき攻撃している方は初めは痛みを感じない、だがダメージが限界を超えるとその部分を焼けるような痛みが襲う技である。

「 親父今日はこれくらいにしとかないか?」

成一の申し出を弦が断ろうとした時に道場の扉が開かれ沙希が現れた。

「 朝食が出来たから一人とも早く来なさいね」

二人は構えを解き沙希の後について行つた。

朝食のご飯と鮭の塩焼きと味噌汁を食べ終わると成一は学校に向かつて行つた。

北港高校は成一の家からは比較的近いところに在り遅刻はした事が無かつた。

今日もギリギリではあるが問題ないはずだった。

だがいつの世にも非常なこととは起きるのであつた。

それは通つている道の近くの公園のことだった。

いつもの平和な公園に女の子を囲むように四人の男が迫つてゐる。

その様子を見た瞬間考へるよりも先に体が動いていた。

手に持つている教科書の入つた重いエナメルバックを男一人に向かつて投げたのだ。

エナメルバックは鈍い音を立てて男にぶち当たり男は悶絶していた。そして女の子と男達との間に体を割り込ませ女の子を背後へ隠れさせた。

「てめえ～何晒すんじゃボケエツ！！」

怒った声で悶絶していた男が生き返り叫んだ。

「いやあ～猥褻行為わいせつを黙つてみていられなくてね」

と頭を搔く成一だったが次の瞬間目の色が変わる。

先ほど四人組みがそれぞれナイフを持っていたのだ。

「おいお前等・・・獲物を持つって事は殺し合いをするつて言つことなんだな」

ドスの聞いた声に驚いた四人組みだが一人の男の「死に晒せつ

！」という声によつて成一に向かつて行つた。

突つ込んでくる四人は次の瞬間目標を・・・成一を見失つた、

「あらら・・・綺麗に横一列に並んでくれちゃつて」

声のした背後を振り返つた四人は懐に潜り込んでいる成一に見事に足払いをされる、と一緒に持つていたナイフを四人とも離してしまふ。

離した四本のナイフの腹の部分を成一は蹴り上げる、そして起き上がろうとする四人に忠告する。

「おーっと動いたら危ないぜ」

次の瞬間四人の顔のあつた部分の地面にナイフが深々と刺さつていた。

「間違えた、動かないと死ぬぜか」

その言葉に心底恐怖した四人は逃げるよう公園から出て行つた。

「んと・・・大丈夫？」

女の子に話し掛けた時に成一は気付いた。

「その制服・・・君つて北港高校なんだ、あれ？でも君は見たことないな・・・一年生？」

容姿的にはかなり可愛い部類に入る黒髪のショートの女の子だった。で同じ学校なら噂ぐらい聞いたことがあるはずなのだと疑問を持つて問い合わせる成一に首を横に振つて答える女の子

「そういえば君の名前は？」

女の子が答えようとした時だつた、背後から殺氣を感じて成一は飛び退いた。

先ほどまで成一がいたところには竹刀が深々と刺さつていた。

「詩歌しひかに触るなあツツツ！」

怒号とともに現れたのは黒髪の長い髪を一まとめにしたボニー・テールの女の子だつた。

「不意打ちは卑怯だろ」

と苦笑気味で現れた女の子に目を向ける成一

「だまれっ！！詩歌に触ることはこの私、佐山五月さやま さつきが許さないっ！」

そつ言つて五月は地面に刺さつた竹刀を抜いて成一に切りかかつた。

「効く耳持たずかよ・・・」

紙一重で五月の攻撃を受け流す成一、五月も相当な腕前のように竹刀を巧みに扱つている。

「五月だっけ？なかなかやるな」

「そういうお前こそ私の剣を避けるなんて一対何者だ？」

そして不意に成一が動きを止める、もらつたとばかりに五月は剣を振り上げる。

無謀にも振り下ろされてくる竹刀に成一が取つた行動は人差し指一本を竹刀に向けるだけだつた。

「血迷つたかっ！！馬鹿者がが

渾身の一撃が当たろうとした時に成一が返答をする

「いや、全然」

すると指に当たつた竹刀が根元からバキッと折れたのだった。

理由は簡単だつた、成一は竹刀に向けて神威を使つていたのだった。

ダメージの許容範囲を超えた竹刀は人差し指一本にも勝てず折れて

しまったのだ。

「少しばかりことじだな」

「お前の名前は何だ！！！」

「ん？俺の名前？ああ俺の名前は  
答えようとした時に学校のチャイムが  
『キーンゴーンカーンゴーン』  
となつた。

「やべえ・・・遅刻だつ！！」

すでに答えることを忘れた成一は学校へ向かって走つていった。

「ちょ、待てつ！！」

五月の叫び声はもはや誰にも届かなかつた。

「ねえ五月早く学校に行かないとまずくない？」

「そうだね・・・行こう詩歌」

そして一人も学校に向かつて走つていった。

## 一話・再開

AM8:52 一年二組に向かって廊下を走り抜ける青年がいた。ピシャツという勢いの良い音を立て青年は扉を開ける。

教室中の視線が一気に青年に集中する、青年は苦笑いを浮かべて席に着こうとする。

「おい、黒須お前が遅刻なんて初めてだな・・・何かあつたのか?」担任である木下響(きのじなひき)が成二に心配そうに聞く、だが成二は「いろいろあります」と答えるだけだった。

「さて・・・さっきも説明したと思うが黒須がいなかつたのでもう一度説明しておこう・・・まだ来ていないが今日中に転校生がやつてくる、途中で授業に合流するかもしれないのに困っていたら助けてあげるように・・・さて俺からの説明は以上だ、ああ後五分で一限目が始まるので遅れないように」

そこまで言つと響は教室から出て行つた。

「おうっ!――成二」

話が終わるなり成二に一人の青年が話し掛けってきた。

「何か用か?」

「成二が遅刻なんて在りえない事だからな」

「在りえない事つて・・・俺も一応人間だぜ、失敗ぐらいする」

「ホントか?」

「ああホントだ」

疑い深そうに青年は成二を見ていたが納得したのか離れていった。

「それにしても健司の野郎ありえないなんて酷いだろ」

ぶつぶつ言いながら成二は教科書をエナメルバックから出して授業に備えた。

一限目は物理だつた、まったく分からぬのに話ばかり進んでいく授業に飽き飽きしながら成二は時計をチラリと見た。  
時間はAM9:15 まだまだ終わりそうもない、成二はすることも

無いので後ろのロッカーへ行き何故か入っている枕を取り出し机に置いて寝始めた。

成一が起きたときには、囚限田の終了を知らせるチャイムが鳴っていた。

そこへ健司がやってきた、健司は殆ど強引に職員室まで成一を連れてくる。

「なんだよこんなとこで呼ばれるようなこと今日はまだしてないぜ」

「その質問もどうかと思うが・・・まあいい、さつきビビサン（響先生のあだな）が転校生らしき女の子を連れて案内してるの見たんだ」

「転校生って女の子なのが・・・でもなんで俺はここに連れてこられたんだ？」

「成一は鈍いなあ・・・いいか良く聞け転校生は一人で一人ともかなり可愛い女の子なんだ、その姿を成一にも拝ませてやる為に連れて来てやつたんだ」

成一は微妙な表情を浮かべて

「なんつう一か・・・ありがた迷惑？」

健司はその言葉を無視して職員室の扉を静かに開けて這う様に忍び込む

「いいか成一絶対に大きな声出すんじゃないぞ・・・コバセンに見つかったらただやすまねえーからな」

「その辺は熟知してるつう一の」

そして女の子の話し声が聞こえる位置まで來た。

「何だか最近聞いたような声だな？」

成一は密かな疑問を抱きつつ進んでいった。

「ここから見えるぜ」

「何がだよ」と言いたくなる衝動を抑えて成一も覗き込む  
だが女の子を見た瞬間成一は

「あつーーー」

「あっ！…あなたは公園の…。」

職員室内の全ての視線が成一とその下にかがんでいる健司に注がれる、

「あっ！…あなたは公園の…。」

女の子の一人が言葉を発するがそれを塗りつぶすようにもう一人の  
女の子が叫んだ。

「お前は詩歌に触ろうとした変態野郎っ！…」

この一人の女の子は公園であつた詩歌と五月だつた。

「誰が変態だつ！…何もしてねえよつ！…」

「黙れ黙れっ！…その危ない視線を私たちに向けるなつ！…妊娠するだろうつ！…」

「てめえ…・・・言いたいことはそれだけか・・・。」

怒りに肩を震わせる成二

「やる気か？いいだろう公園での決着ここで付けてやる」

そう言つて五月も何処からか竹刀を取り出す。

「一撃で決めてやるつ！…佐山流剣術壱の型轟さやまりゅうけんじゅうか！…かたじごん」

五月は竹刀をしつかり握り回りにある机や椅子を巻き込みながら竹刀を振りぬいた。

女の力とは思えない力で振られた竹刀は阻むもの全てを蹴散らすかに見えた。

「効くかあ！…」

成二の怒号とともに鈍器がぶつかり合つた様な鈍い音がした、

「お前…・・・人間か？」

そう呴いた五月の前には先ほどの攻撃を腕で防衛していた成二の姿があつた、金剛を使つた成二の腕に当たつた竹刀は公園の竹刀のように根元から折れていた。

「そんな物じや俺には傷を付けられないぜ…・・・何てつたつて俺の体は鉄みたいに固いからな」

ここぞとばかりに五月を馬鹿にする成一だったが次に五月が取り出したものを見て驚いた、

「あっ！…驚きの声を上げてしまった。

「鉄か・・・なら」の金属バットならダメージを『えられるかもしれないな』

そう言つて何処からか取り出した金属バットを振りかぶる五月、慌てて金剛を使つた成一だが足にまで力を入れていなかつたため吹き飛ばされる。

机に頭から突つ込む成一・・・それを笑う五月、ノックアウトしただろうと思い五月は金属バットをしまおうとする。

「つう・・・なかなかやるな」

その声を聞いて五月は成一を吹き飛ばした方向を見る、そこには机を蹴り飛ばして出てくる成一の姿があつた。

「なつ！無傷」

あちこち制服はボロボロだつたが成一の破けた服のしたの体には傷はおろか痣一つ出来ていなかつた。

「しかし金属バットまで持つてるとは計算外だつたぜ・・・」

と言つた瞬間その場にいた成一の姿が一瞬にして消えて五月の背後に現れた。

「仕返しだ」

と言つて成一は五月の鼻を軽く摘む、五月が怒り振り返つてみるとそこには成一の姿が無く詩歌の隣に立つていた。

「ありやりや・・・成一が本気になつちまつたな」

と今まで傍観していた健司が呟く

成一の使つた消えるような移動法は黒須流奥義である神速じんそく  
神速とは初速から最高速へ一瞬にして移る移動法で100Mを11秒前半で走る成一が使うと消えたように見えてしまうのである。だがこれをまだ完全に習得しきれていない成一には、最高速を出すことが出来ずしかもかなりの負荷が足にかかるため長時間は使えない。

ついでに黒須流奥義は後一つありそれも神の文字が技の名前の中に入つている

「詩歌に・・・寄るなつ！」

そう言つて金属バットを突き出すが怒りによつて踏み込みがずれて  
詩歌の方向へ金属バットが繰り出される。

「！」の・・・馬鹿がつ！――

成一は怒号とともに詩歌を底う、詩歌を底つたせいで金剛のタイミングがずれ鈍い音とともに成一のわき腹へ金属バットの先端がめり込む。

「ツツツツツ――」

成一は声にならない絶叫をだした。

五月はすぐさま金属バットをしまい成一に駆け寄つた。

「お前の体は鉄みたいに固いんじゃなかつたのか！？」

「慌ててタイミングを取るのを忘れちまつた。」

と虚ろな目で答える成一

「し、しつかりしろつ！――きゅ、救急車を頼むつ！――」

その声を聞いた教員の一人が壮絶な戦いから我に帰り急いで携帯で救急車を呼んだ。

「馬鹿だなあ・・・こんなんで救急車を呼ぶなつて・・・。」

そう言つて五月の頭を弱々しいチョップで叩いた後成一は体を無理矢理起こし始めた。

「無理は止めろつ！――」

「そうだ成一さつきのはいくらなんでもやばい」

二人の静止を振り切つて立ち上がつた成一は

「平氣平氣」

と言つてその場に倒れた。

成一が目を覚ますとそこには涙で目腫れた五月と缶コーヒーを飲んでいる健司とタオルを交換する詩歌の姿があつた。  
成一が目を覚まして最初に聞いた言葉は五月の「ごめんなさい」だつた。

あの後職員室で詩歌に成二に助けられたことを聞いた五月はひたすら謝り続けていた。

「良いつて良いつて・・・それより三人とも学校は？」

「俺と詩歌つて子は早退で良いつてさ」

「私と貴方は三日間の謹慎だつて」

「三日で済んでよかつたよかつた」

と笑つて答える成二

「ああそうだ、成二今日俺等三人この病院に泊まつていくからな

・・・今こいつなんて言いやがつた？

「えつと・・・はい？」

「だから泊まるつて」

「ちょっと待てっ！－なんで泊まるんだ！？」

「俺は友達として、この二人は原因を作つたとしてだつて

「いやあ～許すから帰つてくれないか？」

「う～ん・・・却下」

と言つことでこの後何度も成二が健司に抗議したが受け入れてもらうことはなかつた。

その夜成二の病室では、自己紹介が行われていた。

「俺は八神健司、成二とは小学校三年の時にこいつが転校してきてくれる付き合いでこいつのことなら殆ど分かる」

「私は佐山五月、詩歌とは生まれたときからの仲で友達兼護衛で一応佐山流剣術つていう剣術の継承者」

「私は水野詩歌、家業で巫女をしてます。」

「・・・」

「おい次は成二の番だぞ？」

「仕方ないか・・・俺は黒須成二、北港高校に通う少しからだの丈夫な以外至つて平凡な高校生だ」

その説明を聞いたとき五月と健司から冷ややかな視線が注がれた。

「な、なんだよ？」

「体が丈夫つて言つても限度があると思つけどね・・・。」

「成二が言わないなら俺が言つても良いんだぜ？」「成二は唸るように考え込み一言付け足した。

「黒須流の継承者だ」

「じゃあさつき戦った時の技つてその黒須流の技？」  
「まあな・・・始めてあつた時に使つて竹刀を折つたのが神威で職員室で攻撃を受け止めて竹刀を壊したのが金剛で最後に使つた移動法が神速」

「質問いい？」

「何だ？」

「最後に詩歌を庇つた時金剛を使わなかつたのは何で？」

「金剛は一瞬しか使えない技でさつき詩歌ちゃんを庇つた時は金属バットから目を離したせいでタイミングが取れなくて使えなかつた。」

「なるほどねえ・・・」

「さてさて自己紹介も終わつたといひでトランプでもするか？」

そう言って健司は懐からトランプを取り出した。

「大富豪でいいよな？」

そして四人は大富豪や Baba 抜きやポーカーを楽しんだ後眠つた。

血のように赤い空間で血だらけの男が自分に何かを話し掛けてくる。・・・血だらけの男は赤い地面からから這い出るよに何人も出でくる、そして彼等は口々に言ひ。

「思い出せ」 「思い出すね」 「おもいだせ」 「おもいだすな」 「オモイダセ」 「オモイダスナ」と何度も何度も繰り返す。

そして次の瞬間灰色の炎が現れ血だらけの男達を一掃する、全てが燃え尽きた赤い空間に一人残される青年、だが次の瞬間炎が一箇所に集まり人の形を成していく。

炎は血だらけの男と同じ姿をしているがまつたくの別物のように感じられた。

不意に炎が口を開く

「・・・お前の信じた道を行け」

その言葉が終わった瞬間目の前が青白い光に包まれる・・・。

「はあはあ・・・今回の悪夢はハードすぎるぜ・・・。」

そして枕下に置いてあつたタオルで額に滲んだ汗を拭く、

「少し・・・頭を冷やすとするか・・・時間は・・・AM5:12  
か・・・。」

成一は病室から出て屋上に上がつていった。

屋上に上ると詩歌が朝日を浴びて輝いていた。

不覚にも成一はその姿に見とれてしまった。

艶やかに光るショートの黒髪が早朝の病院に吹く風でなびく、成一は無意識のうちに詩歌の背後に立っていた。

「良い風だな・・・。」

不意に背後から聞こえた声に詩歌は少し驚いたが

「うん」

と答えた。

心地よい風が一人を包み込む

「成一君は何でこんなに早く起きたの?」

「嫌な夢見ちまつたから」

と恥ずかしそうに答えた。

「どんな夢?」

「上手くいえないんだけど・・・夢の中の俺は違う名前で呼ばれていて・・・いつも必ず俺の前には血だらけの男がいるんだ、その時の俺はいつも小さい頃の姿なんだけど・・・今日の夢はいつもと違ったんだ。俺の姿が現実のまでその血だらけの男が地面から何人も何人も這い出でてくるんだ。そいつ等は日々に何か言っているんだ。その後はあまり覚えてないな」

「どんな名前?」

「夢の中で言われた」とは全て忘れちゃうんだ・・・だから名前も分からなんだ」

「そつか・・・ねえ成一君・・・成一君は魔法つて信じる?」

いきなり不可思議な事を言い出した詩歌に驚きつつ気を取り直して答えた。

「信じられないと一言では言えないかな・・・でも俺は見たものしか信じない性質たちだから信じられないかな」

その言葉を聞いた詩歌は少し悲しそうな顔をして

「そうだよね」

と呟いた。

二人を屋上の冷風が包む

「はくしょんっ!!」

と豪快にくしゃみをした成一が詩歌に

「体が冷えるといけないからそろそろ戻るわぜ」

と言つて二人は病室へ帰つていった。

病室に帰ると五月と健司の一人が笑みを浮かべながら立つていた。

何笑つてんだ？

と思いつつベットに戻ろうとする

「言つたよね？詩歌に何かしたら殺すって」

「ん？言つたかそんなこと？というより何もしてないんだが……。」

「成二……骨くらいは拾つてやるからな」

すると健司は詩歌を連れてベットから離れる。

「佐山流剣術参の型疾風つ！！」

と五月は言い放つと同時にまたもや何処から取り出したのか分からぬ竹刀で成二を叩き始めた。

一発一発は大した威力ではなかつたが切り返しが恐ろしいほど早かつた。

一発喰らう衝撃が来る前にもう一発くらい何処に早すぎて何処を攻撃されるかも分からず金剛でも防衛が出来なかつた。

「ちょ・・・・・シャレになつてなつ！…ぎやあああああつ！…」

と成二の断末魔が当たりに響いたのは言つまでもなかつた。

処刑が終わつてから三分後健司は詩歌から詳しく述べ話を聞いていた。「つて事は……屋上で偶然あつて少し話しただけだつたのか？」

「うん・・・・・言つのが遅くなつてごめんなさい」

「別に良いつて」

「良く・・・ねえ・・・。」

ベットの上でゴミとなつていた成二がうめき・・・意識を失う

「五月もすぐ人に叩いたら駄目だよ？」

「すまない、私も少し朝だからテンションが上がつてしまつっていた。」

「普通は夜に上がらないかな？」

「それよりこの生ゴミどうする？」

と健司が成二を指差して二人に問う。

「ほおつて置いたら生き返るんじゃないかな？」

「駄目だよつ！…しつかり看病しなきや・・・。」

「気」にすんな詩歌ちゃん……後一十秒で蘇る

そして健司は時計を指差す、針が一十秒、十九秒……と進み一秒、一秒、零となつたところで

「うあつ……い、生きてる……。」

と成一が起き上がつた。

「ほらな？」

その言葉を聞いて二人は苦笑する、成一は訳が分からないという様子で首を傾げていた。

「さてと……じゃあ退院の手続きでもしていく」

健司の言葉を聞いて詩歌と五月は目を丸くした。

「おう、こいつちは荷物でも整理しどくぜ」

自然に切り返す成一

「退院つて……何かの冗談だよね?」

「なんで」

「だつて五月の剣術を金属バットでもうこうじつたんだよ?」

「これくらいの傷なら寝れば治るや……それよりお前らも荷物まとめとけよ」

喋りながらベットを畳んでいく成一

「本当に頑丈なんだね」

「健康第一だからな」

「ここまでくると……化け物では?」

と五月は一人呟いていた。

退院を済ませた成一はそのまま家に帰ろうとしたところを健司に捕まる。

「何すんだよ」

「良いではないか良いではないか」

「何がだボケつ!!」

そして詩歌と五月の手も引つ張り出して

「これから転校生の歓迎会としゃれ込もうぜっ！！！」

「わ、私これから学校へ行かないと・・・。」

「詩歌ちゃん・・・学校は皆で行つてこそ楽しいものなんだよ・・・成一」と五月ちゃんは三日間謹慎処分で明後日まで学校に行けないしさ、今日くらい良いじやん

半ば無理矢理詩歌を言いくるめるとやはり反論してきたのは五月だつた

「詩歌はお前達のように育つたら駄目だつ・・・学校にはなんとしてでも行かせなければ駄目なのだつ！！！」

「でも五月ちゃん、自己紹介で言つた様に詩歌ちゃんの護衛なんだろ？護衛は近くにいないと駄目じゃないかな？」

こうして五月は何も言えなくなり成一は果然としたまま引っ張られていつた。

最初に連れて行かれた場所はゲームセンターだつた。

成一と五月がシユーティングゲームで互いの絶技を見せ合つている中で健司は詩歌ちゃんのコーカッチャーの才能に驚かされ

ていた。

詩歌の取つた人形が健司の腕に収まりきらなくなつたところで四人はボーリングへ向かつた。

詩歌はボーリングがあまり得意ではないらしく殆どスコアにはG<sup>ガーター</sup>が並んでいた。

そして四人は昼休を挟んでカラオケへ向かつた、カラオケでは成一の歌う曲が演歌ばかりだったので三人は苦笑しながら聞いていた。健司は以外にもアニソンと呼ばれるものが好きらしく熱唱している健司の領域には、誰も立ち入ることが出来なかつた。そして最後に詩歌と五月のデュエットで締めて四人はカラオケボックスを後にした。

その頃には日がすっかり落ちていた。

「じゃあ後は夕飯食つたら解散にするか

そして四人は近くにあるレストランへ向かって行つた。

数百メートルほど歩いたところで成一は五月の耳元で囁く

「気付いてるな？」

「ああ・・・人数は十数人つてところだな」

「このまま見逃してくれればいいんだがな」

「それはないだろうな・・・奴らはそんなに甘くない」

「奴ら? 知つてるのか?」

「知つてる・・・だが言えない」

「そうか・・・だがヤバイ奴らなんだな?」

「クリと頷く五月

「五月一気に決めるぞ」

「ああ・・・三、二、一・・・行くぞっ！」

その言葉を合図に成一と五月は後方に走つていった。

とりあえず目に見える敵は五人で懐から何か黒光りするものを出そうとしている

「銃まで持つてんのかよ・・・だが襲うんだつたら出しつくんだけんな」

と言い放ち成一は五人の黒光りしているもののある懐を蹴つた。

五人は拳銃という鉄の塊がめり込み後ろへ吹つ飛んだ。

一方五月は木刀を何処からか出し相手の手の甲の部分を的確に叩いていく、グシャという嫌な音を立てながら潰れる手は爪が剥がれ指がイケナイ方向に曲がっていた。

そして数分後相手は誰一人として立つていなかつた、用事が住んで急いで一人の所に戻ると三人の先ほどと同じ様な男が苦悶の表情を浮かべて横たわっていた。その回りには拳銃と思われる部品が散らばつていた。

「危ないぜ二人ともが弱い詩歌ちゃんと俺を置き去りにするなんて」「か弱いつて・・・何でもそのものの構造を理解して壊しちまうことが出来てしかも一晩で族を潰した喧嘩馬鹿な奴の言つことかそれ？」

「酷い言いようつだな・・・俺はせっかく合コンで知り合った女の子を横から取るつとした族の頭にむしゃくしゃして潰しただけだぞ？」

「あーそーかいそーかい  
ところでこいつら誰?  
しらね  
じゃあ放置で良いよな?  
良いんじやないか?」

いまいち一人の乗りに着いていけない詩歌と五月だったが成一と健司がそのまま進んでいったので急いであとを付いて行つた。

四話：解散後に・・・

色々とあつたが無事レストランへ着いた四人は店員に注文を言い料理が運ばれてくるのを待っていた。健司はコップに入った水を一口飲むと意を決したように質問を始めた。

「成二に聞きたいんだが・・・いつの間にあんな危なそうな連中に喧嘩を吹つかけたんだ？」

「俺は平和主義者だから喧嘩を売った覚えはないんだがな」

「その言葉・・・どの口が言う？」

「この口」

と成二は自分の口を指して見せ、健司は頭を抱える。

「でも良かつた良かつた、あんな大したことのない連中で」

「拳銃は少しひびつたけどな」

「それをぶつ壊したお前が言うか？」

「それもそうだな」

そして一人は大声で笑いあつた。

「あの・・・お二人は銃が怖くないんですか？」

二人の行動に疑問を溜め込め切れなくなつた詩歌が質問をした。

「怖い、怖くないで言つたらやつぱり怖いな・・・でも所詮は鉛玉が真つ直ぐ飛んでくる止まりだろ？だつたら五月の剣術みたいに変幻自在で避けにくい方が脅威だな」

「そうだな、俺も五月ちゃんの剣術を避けられる自身はないからな」と二人は五月の方を見る。五月は外をしきりに警戒しているようだつた。そして一人の目線に気付くと睨みつけてきた。

「なんか用か？」

「いや、別に」

と成二と健司は声を合わせて答えた。

少し疑つた五月だがまた元の様に外を見始めた。  
そこへ店員が料理を運んできた。

「鮪の漬け丼のお客様」

それに軽く手を挙げて五月が答えた。

「力キフライ定食のお客様」

次に健司が手を挙げた。

「トロトロ卵雑炊のお客様」

その次に詩歌が手を挙げた。

「灼熱地獄鍋のお客様」

最後に成一が手を挙げた。

食事が始まつたが一人を除いた三人は全く料理に手をつけようとしない。

「おい・・・頼むから俺がいる時にそれは頼まないでくれよ・・・。」

「目、目が痛い・・・。」

「成一君・・・喉とか痛まないの?」

真っ赤な鍋に一心不乱に挑む成一は額に汗を滲ませながら詩歌の問い合わせに親指を立てて答える。

数分後三人が料理に手を付ける前に成一は灼熱地獄鍋を食べ終えた。  
「うまかつたあ・・・。」

満足そうにポンポンと腹を叩くと回りの三人がまだ食べてないことに気付く。

「どうしたんだ三人とも、早く食うないと冷めるぜ?」

「成一の料理を見たら少し食欲が・・・。」

「というよりもあれは本当に人の食べ物か!? 目が匂いだけで痛くなつたぞ! !」

「もう一度病院にいつて診てもらつた方が・・・怪我の後遺症で味覚が変になつたのかもせんし」

その後何とか皆が料理を食べ終えたのを見て成一が店員に食後のデザートに地獄の業火風パフェを頼もうとした時は三人が無理矢理それを止めた。

そして会計を済ませるとレストランの前で解散となつた。

本来ならば成一と健司、詩歌と五月という感じに分かれて一三手の道に分かれて帰る所だったのだが、健司が少し約束があると言い二三手に分かれて帰ることとなつた、

成一は先ほどの戦いのせいか少し警戒しつつ帰路を進んでいたが、何のアクシデントもなく家に着いてしまつたので少し拍子抜けしてしまつた。少し違う意味で疲れていた成一はベットに横たわるとそのまま寝てしまつた。

そして少し時間は遡りさかのばレストランで四人が別れた所、詩歌の横に張り付くように一定の速度で歩き続ける五月だが背後に気配を感じて振り返つたと同時に木刀を取り出す。

「誰だつ！！」

薄暗くなつた背後の道に向かつて叫ぶ五月だつたが次の瞬間声を失う、そこには銀色の光を放つ槍を携えた健司が立つていた。

「馬鹿な・・・それは十六宝具の一つ・・・崩壊閃」

「やつぱり十六宝具の事を知っていたか・・・だつたらやはり成一に近づいたのは神々の剣が目的か・・・。」

「か、神々の剣だと！？六本の神の作った剣がまだ残つていたのか！？」

「何だ知らなかつたのか？・・・なら尚更生かしておけねないぜ！」

健司は槍を構えて突撃をしてくる、五月は木刀を捨てて何処からか真剣を取り出す。

崩壊閃と真剣が触れ合つた瞬間、何の前触れもなく真剣は粉々になつた。そしてそのままの勢いで槍の柄で五月の槍を払う。

「まさか知らなかつたわけじゃないよな？崩壊閃の能力の一つ、触れた物質を崩壊させる。まあ生物とこれと同じ十六宝具と神々の剣みたいな特殊な力を持つた者や神が作った者は崩壊させられないがな」

そして槍の刃の部分を五月の首に押し当てる。

「言え、誰の命令でここまで来た」

「・・・」

「話が進まないな」

その時後ろで強い力の波動を感じた。振り返ろうとした時健司は横に吹っ飛ばされた。

「帰りが遅いから見に来て見れば・・・詩歌は震えてるは、五月は殺されかけてるは、いつたいどうしたって言つの?」

そう言いながら暗闇から出てきたのは二十歳かその前後一、二歳と言つ感じの黒髪の女性だった、服装はなんとも場違いな巫女の服装だった。

その姿を確認した五月は少し離れたところで腰を抜かしている詩歌を抱きかかえてその女性の傍に行つた。

そして槍を杖のようにして健司も出てきた。

「痛いなあ・・・つてかお姉さん誰ですか?」

お姉さんという言葉に機嫌を良くしたのか女性は堂々と答えた。

「私は対魔専門会社社長、水野幸子よつ! よくも私の可愛い妹と有能な社員を傷つけてくれたわね、といつか・・・あなたは誰?」

「俺は、八神健司・・・『普通』の高校生だ」

「最近の高校生はそんな物騒なものを持つの? それと私が聞きたいのは所属よ」

「所属は無しだな一応・・・というか・・・」ちぢりこそすまないな  
そう言つて健司は距離を取り、槍を突き刺して手を上に挙げて降参のポーズを取る。

「何のつもりかしら?」

「見て分からぬのか?」

「分かっているわ・・・でも裏がありそだからね」

「裏なんてないぜ? ただ俺は、なんとなく教えられた危険な奴らとは違う気がしたから降参しただけだ」

「教えられた奴らって?」

「この世に存在する対魔組織でも最大規模を誇り尚且つ他の対魔組織を追随させない戦闘力を有する、殆ど全ての十六宝具と神々の剣

を所有する対魔組織の奴ら……どう考へてもあなた等じゃないだろ?」

「じゃあ私たちが弱そうだから信用したと?」

「そういうこと」

その後無言で幸子は健司の近くにより・・・健司を殴り飛ばした。

「減らず口を叩くと・・・長生きできないわよ?」

「よく分かりました」

ボロボロになつた健司は槍を幸子に奪われ縄で縛られていた、

「お姉さん・・・今から何処に行くんだ?」

「私たちの本拠地・・・と言つても普通にただの神社ね」

そして健司は車に乗せられて連れ去られていった。

## 五話・運命は突然に

「おーおい、ホントに神社じゅん。」

呆れたような驚いたような声で田の前に広がる広い神社を田にしながら健司はボソッと呟いた。

「そこの捕虜ぼさつとしてないでついて来なさい」

幸子にそう言われた健司は「俺は捕虜あつかいつすか」と悲しくなりながらも渋々幸子の後をついていった。その後ろには今だムスつとした五月とおぼつかない足取りで崩壊閃を持ちながら歩く詩歌の姿があつた。

「しつかり聞かせてもらひからな、あなたの正体もさつき言いかけてた成一の話もな」

右手を腰に当て左手の人差し指を健司を向けたポーズで五月は言ったのだが、そのポーズが某アニメ悪役の登場シーンのポーズと被つて見え健司は思わず吹いてしまった。

「言ひか言わないかは俺が決めることだ、まあ一晩付き合ってくれるなら・・・口が滑っちゃうかもしけないけどな」

健司の言葉に五月の顔は真っ赤になり、無言で反応する間も『えず殴り飛ばした。

「ほらほら五月ゴミを増やすんじゃない」

幸子の言葉に五月は「すまない」と言い健司は「捕虜からゴミに格下げつすか」となにやらうめいていた。

そして大した抵抗もしないまま健司は神社の中まで連行された、幸子はそこら辺に健司を座らせると左右に五月と詩歌を座らせると口を開いた。

「さて・・・確か八神健司だったわね?この二人と知り合いみたいだけど関係は?」

「恋びつ・・・のあつ!..」

恋人と言おうとした健司を五月の拳が襲つた。

「幸子さん、こいつはただの学校の知り合いです」と五月は沈黙した健司の代わりに答えた。

「へえ・・・じゃあ成二つて子も同じ学校なの?」

幸子の問いに五月は小さく「はい」と答えた。

その後も簡単な質問が続いたが、好きな女の子のタイプや好きな料理など意味の無いことに対しても積極的に答えるが出身地や両親の話になるとノーノメントを通した。

「それじゃあ後三つだけ質問、崩壊閃は何処で手に入れたの? 教えられたって言つてたけど誰に? そして成二つて子が神々の剣と関係あるってチラッと聞いたけどどういう意味?」

「全部ノーノメントって言いたいけど、少しだけ迷惑かけたみたいだしヒントぐらいなら教えてやるよ、崩壊閃は生まれた頃から近くにあった、んで教えられたのはこっちの業界でも中々有名な俺の武術の師匠、そして成一のことだけ時が来れば必ずと分かる。」

そう言うと健司は軽く腕を動かす、すると手を縛っていた縄が粉々に弾けとんだ。驚く三人をよそに軽く踏み込み一瞬で三人の近くに寄ると崩壊閃を詩歌の手から取り握つて肩に担いで「また明日学校で会おうな」と言つて走つていった、呆然としていた三人だつたが五月は我に返り健司を追いかけようとしたが幸子がそれを止めた。

「本当の実力もまだ見極められていない危険な相手よ、迂闊に追う事は無いわ。それにこちらに危害を加える気は無いようだし、まあ大丈夫でしょう。」

五月もそう思つたのか黙つて従つた。

「それにも崩壊閃か・・・これに私たちの持つている二つの宝具と一つの神々の剣、あの組織が八つの宝具と三つの神々の剣を持つと・・・。後不明な十六宝具は五つ神々の剣が一つ、これに成二つて子に関係ある神々の剣が一つだから神々の剣は後一つ、もし崩壊閃と成二つて子に関係ある神々の剣がこっちの手に入つたらやつ等に対抗が出来るかもしれないわね」と呟くと幸子は不適に笑つた。

その日の夜五月は境内に一人立っていた。

「健司は完璧に崩壊閃を使いこなしていた・・・私はこれを使いこなせるのだろうか、否使いこなさなければ」

そう言つて五月は紫色の光を放つ刀を取り出した。その光は綺麗だが

が気持ち悪く、神々しいが禍々しかつた。

「反転狂月よ、私はお前を使いこなして見せるぞ」

そう言つて五月はその刀を静かに抜いた。

次の日の学校で成二の様子がかなり変なのに五月と詩歌は驚いていた、よもや昨晩の事を健司が言つたのかと思い問いただしたが健司は「見てれば分かると」言つて笑みを浮かべていた。

そして時間は過ぎ四時間目が後数分で終わると言う時だつた、時間が経つにつれ成二の様子が悪化しているのに気付きただ事ではないと五月は目を光らせていた。そして四時間目の終わりのチャイムがなつた時だつた。挨拶が終わつた瞬間を狙うかのように健司は教室を飛び出した、その様子は狙つていた獲物が隙を見せた時の狩人に酷似していた。

呆気に取られている二人を健司が何処かへ連れて行く、連れて行かれた場所は食堂だつた。そして食堂のカウンターに大量のプリンを抱えた成二の姿があつた。成二の周りにはプリンを奪おうとハイエナのように纏わりつく男子達がいたがその全てが成二の殺人的な眼光により奪うという行動を取ることが出来なつた。

「な、なんなの!？」

「健司君、成二君は何を?」

詩歌の質問に健司は笑いながら説明を始めた。

「成二には大好物が三つあつてね、激辛料理と寿司とプリンがそんなどけど。この学校の食堂で一週間に一度作られる特製プリンが安いうえにかなり美味くて成二も大好きなんだ、しかも成二はこの

学校に八割がたプリン目当てで入学したぐらいなんだ、要するに今

日成一の様子が変だつたのはプリンが樂しみだつたからなんだよ。」

詩歌は変だつた理由に思わず笑つてしまい五月は呆れてしまつた。

そこへ最高の笑みで成一がやつてきた、手には戦いの戦利品である大量のプリンが抱えられていた。

「あははっ！－このツヤツヤした輝き、縄のように滑らかな肌・・・俺はここに宣言するつ！－いつかプリン教を作つてプリンについて解説しゆくしてやるつ！」

「成一、まあ頑張つてくれ」

と成一の肩に手を置いて健司が答えた。

そして四人の楽しい昼食が始まつた、朝から警戒していた五月も健司が何のアクションも起こさないので氣を張るのをやめていた。

「んで成一、お前そのプリンいつもより結構多いけど全部食べ切れるのか？」

「余裕だ」

そして宣言どうり成一は全て残さず食べきつてしまつた。

「やつぱり化け物だな・・・」

と五月が呟いたのは当然というものだつ。

その時成一は腕の辺りが熱くなつてゐるのに気付き咄嗟に押さえた。だが全く熱さはなくならず逆に激しくなる一方だつた。頭の中に何かが浮かび上がり消えていく

いつたいなんなんだ！－

周りの声も耳に入らなくなつていつた、健司や五月や詩歌が口をパクパクさせているが耳には何も入つてこない、時間が進むのがゆっくりに感じた、そして押さえる力が強すぎたあまりに受けた腕の部分から銀色の大剣の細工のついた腕輪が見える、その時に弾かれたようになじみが再生される言葉が自然と口から出た。

「滅びを知らない神々の剣・・・」

その言葉に五月や詩歌はもちろん健司さえも驚いた。

そして成一は氣を失つた。

## 六話・目覚め

健司、五月、詩歌の三人は成二を保健室まで連れてきてベットで寝かしていた。三人の表情は皆重苦しくジックリなされる成二を見ていた。その時沈黙を破つて詩歌が口を開いた。

「私の聞き間違えならいいんですが、成二君氣を失う前に『滅びを知らない神々の剣』って言つていませんでした？」

「確かに言つていたな・・・。」

五月は肯定して頷いた。そして代わる様に健司が話し出す。

「滅びを知らない神々の剣、第一の神々の剣『炎天下』その力万物を破壊し万物を再生す・・・たとえ創造主さえもこの理より外れることは出来ず・・・まさかそんな厄介なもん持つてたとはな」

健司の最後の言葉に五月は驚いた。

「まさかお前、成二の神々の剣を知らなかつたのか！？」

「どうやつて知れつて言つんだ？だいたい俺は成二が神々の剣関係あるのは知つてたが、六つの神々の剣のうちどれに関係しているかを知つてるなんて誰にも言つてないぜ？」

「だが、お前はっ！」

言い争いが起きそうになつたところで

「一人とも黙りなさいっ！」

と言う詩歌の声が轟いた。そのあまりの迫力に健司も五月も思わず黙つてしまつ。

「ここで言い争つても何もおきないのは分かつてゐるでしょ？」

二人は顔を見合わせコクコクと頷く、それに満足したのか詩歌は息をふうふうとつくと「成二君がおきるように皆で祈りましょう」と気を取り直して言つた。流石の健司も「少しイライラしてたんだ、ごめんな」と言つてその場に座り込んだ、保健室にはまた静寂が戻り時計の針が進む音が時を刻んでいた。

不意に成二が寝返りをして左腕がぶらりとベットからたれる、その

時ベットの鉄パイプと腕にはめてあつた何かがぶつかり甲高い金属音をたてた。三人は一斉に成二の方を向き腕につけてある物を見て絶句した。

「何で、何で成二がこれを持っているんだ！？」

「畜生っ！！今まで何で気付かなかつたんだつ！！！」

「成二君貴方つていつたい・・・」

三種三様の言葉が保健室に響き渡るがそれも一瞬の事だった。

成二は放課後に目を覚ました、成二が起きたときに目にしたのは付きつ切りで看病をしていた三人の姿だつた。成二は三人に恥ずかしそうに「迷惑かけたな」と言つてベットから立ち上がつた。そして「んじや皆帰ろつか」と言つたが誰も返事はしない、思いのほか三人の顔色が先ほどより暗く感じられた。どうしたんだ?と声を掛けようとしたところで詩歌が成二に話し掛けてきた。

「成二君、これから私たち三人について来て欲しいところがあるの。  
・・来てくれる？」

「良いけど・・・。」

成二の言葉に「ありがとう」と詩歌は言つた。そして成二は三人の後について行つた。

学校の校門の前には一台の車が止められていた。

「この車に乗つてください」

詩歌の言葉に成二は大人しく従い車に乗り込んだ。次に詩歌が乗り込みそして五月が乗り込み最後に健司が乗り込もうとして半身乗り込んだところで車が急発進した。

「ぐはっ！！」

健司は車の外に投げ出され、「三回転したところで地面に転げ落ちた。

「運転手さんいつたい何やつてるんですか！？」

聞いただそうと成一が運転手の顔を覗き込むと運転手の顔は女で口元は笑っていた。

「すみませんね、足が滑つてしまつて」

と女は罪悪感の欠片も見せず、満足そうに言った。成一は「絶対わざとだ」と思いながらも姉生きをしたいと思いつつも口出しづしかつた。

そして少し走ると車は神社の前に止まつた。

「ここが、目的地？」

半信半疑に五月に問うと「そうだ」と短く肯定した。

そして成一は車から降りると一人に神社の中まで案内された。

「んで、ここで質問なんだがどうして俺はここに連れてこられたんだ？」

「姉さんが来るまで少し待つてください」

成一は詩歌に言われたとおり待つた、すると奥の扉が開きそこから巫女の服装をした女性が歩いてきた。

「う、運転手！？」

思わず叫んでしまつた成一に笑みを浮かべながら女性は自己紹介をする。

「私の名前は水野幸子、詩歌の姉です」

驚きのあまり言葉も出ない成一だったが驚きを飲み込み先ほどの質問をしてみる。

「どうして俺を呼んだんですか？」

「その前に聞きたいことがあります、あなたの腕についているその腕輪いつたい何処で拾つたものなんですか？」

その質問に成一は黙つてしまつ、そのまま結構な時間が流れついに成一は言葉を紡ぎだした。

「実は俺、八歳以前の記憶が無いんだ・・・その時には俺の腕にはこの腕輪がついていて、だから俺にもいつこの腕輪を手に入れたのか分からぬ」

その言葉に幸子少し困つた顔をしたがポンと手を叩く

「記憶を取り戻したくありませんか？」

「そりや取り戻せるなら取り戻したいけど……。」

出来ないから困ってるんじゃないかと肩をすくめた成一だったが、そんな成一に幸子がいきなりお札を投げつけた。わけもわからず受け止めようとしたが思いのほか速く頭にあたった。と同時になんだか急に眠気が湧きあがり成一はそのまま眠ってしまった。

「ね、姉さんいきなり何してるんですか！？」

驚きのあまり成一に駆け寄ろうとした詩歌を幸子は手で静止させた。「少し魔法で記憶を蘇らせてあげようと思つてね」

そう言つて幸子は札を取り出してそれに筆で何かを書くと成一の頭に押し当てるながら唱えた。

「彼の者の記憶を蘇らせて……。」

すると札が一瞬で燃え尽きた。

「なっ！？」

驚きの声をあげると同時に幸子はその場から飛び退く、刹那成一から白い炎が噴出し包み込んだ。

すぐに三人は神社から出る、と同時に白い炎が神社の屋根を衝き抜け神社を包み込む。

「いつたい何が起きてるんだ……。」

「成一君は、成一君はどうなったの！？」

「二人とも何か来る、準備しなさい」

幸子の言葉に五月は真剣を構え、詩歌は札を取り出す。

そして神社から人影が現れる。

「この世界に出るのは何年ぶりだろうな……。」

その声は成一のものだつたが口調は全く違つていた。そして人影は三人に向かつて歩み寄つてきた。

その姿は成一だつた、だが成一は炎に包まれているにもかかわらず何処にも焼けた形跡が無かつた。

「お前はいつたい誰だ？」

五月の言葉に成一の形をした者は律儀に答える。

「我が名はモア、我が主レノンに仕える白き炎の化身なり」「では、モアとやらに問う。レノンとはいつたい誰だ？」

その言葉にモアは無表情で答える。

「貴様等の前に存在するこの身体の持ち主こそレノンなり、そんなことも知らずに我を解き放つたのか？」

そう言うとモアは右腕を振り上げて勢い良く下ろす。すると背後で燃えていた白い炎が膨れ上がり津波のように二人を襲つた。詩歌は札を投げて対抗しようとするが一瞬で燃え尽きてしまう、そして幸子の札も同じように燃え尽きてしまつた、それを見ていた五月は真剣を投げ捨てるに新しい刀を取り出した。紫色の光を放つ怪しい雰囲気の刀、反転狂月だった。

「そんな炎、切り裂いてやるつ！！」

そう言って二人の前に出ると反転狂月を振りかぶる、怪しい音を立てながら白い炎を押さえ込む反転狂月を手に五月はモアに笑みを浮かべて見せた。

「反転狂月か、中々の業物を持っているようだな。ならば我也使わせてもらうとしよう」

そう言つて腕輪のついている腕を前に突き出す。

「滅びを知らない神々の剣、現れる『炎天下』つ！！」

すると腕輪は形を変え大剣へと変わる、そしてその剣から放たれる眩い光によつて辺りが真昼間のように明るくなる。

「まさか、本物の炎天下とは・・・」

五月の顔が苦虫を噛み潰したようになる。

「ついでに我的本当の姿を見せてやろう」

そうすると白い炎が集まり龍のようになつた、龍は炎天下に纏わりつくと咆哮をあげる。と同時に炎天下は振り下ろされ大地を揺らす白き炎の龍の一撃が三人に迫つた。避けることも防御することももう遅い三人はもはや死ぬしか道が無かつた。がその時銀色の槍を持った男、八神健司が三人の前に立ちふさがる。

「崩壊閃つ！！最大出力だつ！！」

その言葉と一緒に白い炎の龍は崩壊閃に触れたところから崩壊していく、だが崩壊させている本人さえもその熱気で皮膚が焦げていた。そしてモアの攻撃を全て受けきると同時に健司はその場に倒れこんだ。

「もはや見事としか言いようが無いな、先ほどの攻撃を受けきるとは・・・。敬意を払つて苦しませずに一瞬で終わらせてやろう。」

そう言つてまたモアが炎天下を振り上げた時に五月は走っていた。

「健司が作ったこのチャンス、無駄にしてたまるかっ！！佐山流剣術壱の型轟つ！！」

渾身の一撃を放つた五月だったが炎天下で受け止められてしまつ、とそこに弓矢を取り出した幸子の姿があつた。

「実はね、これも十六宝具なの、名を蒼天弓。さうてんきゅう貴方なら知つているわよね？」

先端に札をつけた矢は音速よりも速くモアを襲つた、だがモアの人を超えた動体視力により矢を掴まれる、がその時札の効果が発揮され腕に電撃が走る。

「これで両腕は封じたわ、詩歌後は頼むわよ

頷く詩歌の手には似つかわしくない左手用短剣マイノンゴーチュウが握られていた。

「その柄で思いっきり殴つてやりなさい」

幸子の言葉に走り出す詩歌だが、モアもただではやられなかつた。

白い炎を全て詩歌に差し向けたのだ

突然のことでの反応できぬ詩歌だったがそこに崩壊閃が飛んできて炎を崩壊させた、後ろ重くと身体を無理矢理起こして崩壊閃を投げた健司の姿があつた。もう詩歌を止めるものは無かつた、詩歌は一気にモアに駆け寄ると頭を思いっきり叩いた。

「ぐつ、」

という声をあげてモアは倒れた、そしてモアが起き上がる気配は無かつた。

戦いが終わり、詩歌は急いで健司の怪我の手当てをした。包帯を巻き終わると詩歌は先ほどの左手用短剣を取り出して唱える。

「癒して」

すると左手用短剣は緑色の光を放ち、健司の火傷はあつという間に目立たなくなつた。

「もしかして・・・万物を癒す神々の剣、『輪廻転生』？」

「そうです、まだまだ万物を癒すつてことは出来ない半人前ですけど」

とおじけながら詩歌は答えた。

「しかし、全くあんた等は問題ばつか起こして・・・。きっと他のやつ等も今回の騒動で気付いちまつたぜ？」

健司の言葉に唇を噛む三人、

「結界張つといったから外への被害とか情報漏れは心配するな、とりあえずこれからのことを考えたい。俺の家まで来てくれ、神社が火事で壊れちまたからじやしじうが無いだろ？」

そして健司は成二をおぶると三人を連れて家まで帰つていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9386c/>

---

神々の剣

2010年10月28日07時54分発行